ZOCALO 2024 4 ▸ 6

ZOCALO＝ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

美術館で椅子に座るということ

MOMASコレクション　チェアーズ –椅子の美術館
2024年3月2日(土)〜6月2日(日)

図1

みなさん、椅子は好きですか？　「椅子の美術館」に勤めて4年になる私は、子供も大人も惹きつける椅子のパワーを日々実感しています。館内を歩けば、漫画『SPY×FAMILY』の表紙を飾ったことで一躍人気となった《マシュマロ・ソファ》(図1)に座って記念撮影する来館者を頻繁に見かけます。私たちは椅子を見ると、つい座り心地を確かめたくなるし、素敵な椅子に座った自分は、なんだか素敵になった気がしますよね。

さて、美術館で椅子に座るのはどんなときでしょうか。広い展示室を見て回るのは意外なほど疲れるものですから、途中で椅子に座って休憩する方も多いことでしょう。当館の展示室に優れたデザインの椅子を置くことを提案したのは、初代館長を務めた本間正義です。本間館長の言葉を引いてみましょう。

美術は私たち人間自身が作ったもので、もともと身近かにあったものであります。しかし、それが価値の高いものとして、大切に保護されるようになってきています。美術館でいかにそれをストレートに見せようとしても、おのずと制約がついてまわります。そこでせめて美術作品をじかにふれることが出来ないとしても、ゆっくりくつろいで見るということは出来ないものか。椅子は休憩室だけにおしこめずに、ギャラリーの中に進出させるべきではないか。＊1

美術を肩ひじ張らずリラックスして楽しめるものにするため、椅子のパワーを借りたというわけです(図2)。1980年代当時、休憩室ではなく展示室に椅子を置くというのは、さほど一般的ではなかったようですね。また本間館長は、椅子を展示の小道具として空間演出にも役立てていました。

図2

例えば水墨画やデッサン展のような色彩のない場合には、ダイヤモンド・チェアのカラフルなシートを入れて変化をつける。日本画展を行う時には、和風の剣持デザインの籐椅子を配置する。＊2

展覧会の性質によって展示室の椅子を入れ替える美術館はなかなか珍しいように思いますが、現在でもこの方針は変わっていません。本間館長のいうように、モノクロの展示空間にカラフルな椅子を置くのは少し勇気がいりそうですが…。

展示作業が終盤に差し掛かると、「椅子はどうする？」という会話が聞こえてきます。椅子を選ぶのも担当学芸員のひそかな楽しみなのです。出番が多いのは、やはり《バルセロナ・スツール》(図3)ですね。シンプルで空間に馴染みやすく、前後がないのでどの方向を向いても座れます。軽やかでコンパクトな《バタフライ・スツール》(柳宗理、デザイン：1953-54年、製品化：1956年)も、映像を見る椅子などによく使っています。ただ、時には変わった椅子を置いてみることも。展示する作品と関連づけられるような椅子を選べば、展示室で椅子に座る行為がたちまち鑑賞の体験を豊かにしてくれるからです。例えば、作品と同じ時代にデザインされた椅子に座ることで、制作時の雰囲気を身体で感じとれるかもしれません。

図3

企画展「アブソリュート・チェアーズ」(〜5月12日)では、デザインの文脈を離れて美術の視点から椅子を見直すというテーマを際立たせるため、あえて会場に定番のデザイナーズ・チェアを置きませんでした。そのかわり、山田毅と矢津吉隆のユニット・副産物産店が廃材から作ったユニークな椅子に座ることができます。また、出品されている映像に重要な役まわりで登場する、ロッキングチェア(図4)と車椅子を置いているのもポイントです。いずれも、展示室内の座れる椅子として目にする機会はめったにないでしょう。

図4

当館では、多種多様な椅子に座って楽しむ体験を軸としながら、椅子に関連する展覧会やワークショップ、出張授業など、多方面にわたって椅子の魅力を発信し続けてきました。MOMASコレクション「チェアーズ —椅子の美術館」では、当館の歩みを支えてきた椅子たちとともに、「椅子の美術館」としての活動を振り返ります。(S.Aya.)

＊1　本間正義「あいさつ」『椅子の美術館』埼玉県立近代美術館、1989年、3頁
＊2　本間正義「美術館の椅子」『世界の椅子コレクション ふれあいの椅子展』カタログ、大丸ミュージアム、1984年

図1　ジョージ・ネルソン《マシュマロ・ソファ》デザイン・製品化：1956年
図2　開館記念展「印象派からエコール・ド・パリへ」会場風景、1982年
図3　ルートヴィヒ・ミース・ファン・デル・ローエ《バルセロナ・スツール》デザイン・製品化：1929年
図4　作者不詳(ゲブリューダー・トーネット社によるデザイン)《ロッキングチェア》デザイン・製品化：1860年／1890年頃

さいきんのたまもの　令和4・5年度 新収蔵品紹介

ここでは、令和4年度・令和5年度に寄贈いただき、新たに当館のコレクションに加わった作品をご紹介します。

① 彦坂尚嘉《史律におけるプラクティス 8》1969年/1976年再制作

当館では、もの派をはじめとする1960年代末から70年代の日本の美術動向に関わる作品を収集しており、コレクション形成における1つの軸になっています。令和5年度は、69年に多摩美術大学の学生により結成された組織・美術家共闘会議(美共闘)のメンバーであった彦坂尚嘉の作品が新たに加わりました。寄贈された「史律におけるプラクティス」シリーズの2点は、絵画を「木枠とビニール」、あるいは「透明なアクリルを塗った板」①といった単純な要素に還元したもので、物質性が強く表れています。美術の根源や制度そのものに対する問いなおしがさかんに行われた、当時の日本の美術動向を示す重要な作例です。

文谷有佳里のドローイングと佐野陽一の写真作品②は、令和4年度に開催された企画展「桃源郷通行許可証」への出品がきっかけで収蔵に至りました。企画展内では、当館の収蔵作家である菅木志雄、斎藤豊作の作品とそれぞれ組み合わせて展示していましたが、今後もさまざまな作品と共鳴し、さらなる魅力を放っていくことが期待されます。横尾龍彦の絵画作品と諫山元貴の映像作品も、展覧会の開催や出品を機に寄贈を受けました。とりわけ横尾は、シュルレアリスムに影響を受けた幻想的な作風で知られ、晩年には埼玉を拠点に活動した重要な作家であるにもかかわらず、これまで当館では作品を所蔵していなかったため、待望の収蔵といえるでしょう。この度、展覧会出品作のなかから5点が寄贈となり、横尾の画業を幅広く紹介することが可能となりました。なお、県ゆかりの作家の作品や資料の寄贈は多く、ほかに、菊沢武江の日本画、斎藤与里が手がけたユニークな巻子、田中保(やすし)のドローイング、須田剋太の初期の具象画、瑛九の写真(細江英公スタジオが手がけたフォト・デッサンの複製)、堀越陽子の彫刻、遠藤利克のレリーフ作品などが新たに収蔵となりました。

多種多様な寄贈作品のなかでも特に異彩を放つのが、森村泰昌の写真作品《花と包丁》(1990)③です。森村といえば、名画の登場人物や誰もが知るポップスターに扮したセルフポートレートで知られる作家ですが、本作の元となったイメージは定かではありません。写真には、右手にブーケ、左手に出刃包丁を持ち、白いバレリーナ風の衣装を身にまとった森村が等身大に近い大きさで写っています。最大の特徴は、その奇妙な姿と呼応するように、鑑賞者の目線の高さに合わせて、壁から突き出るような形で2本の包丁が写真の横に設置されることです。森村は本作の発表当時、展覧会リーフレットに「死覚について」と題したマニフェストのような文章を寄せています。この包丁は、現代において芸術作品といかに対峙するかという作者の思想を反映しているのかもしれません。

最後に、新たに寄託となった作品をご紹介します。丸沼芸術の森より寄託いただいたのは、ポール・セザンヌが晩年に描いた水彩画《シャトー・ノワールの近くの高台から見たサント＝ヴィクトワール山》(1900-02)です。モネやピサロなど印象派の画家と交流し、キュビスムやフォーヴィスムといった近代美術の動向に多大な影響を与えたセザンヌですが、日本においても、県ゆかりの斎藤与里や森田恒友をはじめ、多くの画家たちの関心の的となった存在でした。今後、関連のある作家の作品とあわせて展示あるいは調査研究することで、より多角的な視点から互いの作品を捉えなおすことが可能となるでしょう。このほか、一時期浦和に在住していた画家・武内鶴之助のパステル画と、菊沢武江が手がけた絵巻も新たに寄託となりました。

ここでご紹介した作品の一部は、開催中のMOMASコレクションで展示しています(〜6月2日。一部展示替えあり)。そのほかについても、MOMASコレクション内で順次展示していきます。この場をお借りして、たいへん貴重な作品や資料を寄贈・寄託してくださった皆様に心から御礼を申し上げます。(S.Ayu)

② 佐野陽一《flow(秋日)》2015-22年

③ 森村泰昌《花と包丁》1990年　※写真部分